

「令和5年度富山市中学校1年生学力調査」  
結果の概要について

富山市教育委員会



# 「令和5年度富山市中学校1年生学力調査」結果の概要について

## I 本調査の目的

- 各中学校が、1学年生徒の入学時の学力定着状況を把握し、今後の学力向上に向けた学習指導に生かす。
- 生徒一人一人が自分の努力すべき課題に向かって、意欲的に学習に取り組む。
- 各小学校は、卒業生の調査結果を踏まえ、学習指導の改善・充実を図る。

## II 実施状況

- 実施期日 令和5年4月11日(火)、12日(水)
- 調査教科 国語、社会、数学、理科、英語
- 実施学校数・生徒数

実施学校数	生徒数	
26校 1分校 (附属中を含む)	在籍数	3,333人
	受検者数	3,197人 (5教科全てを受検した生徒数)

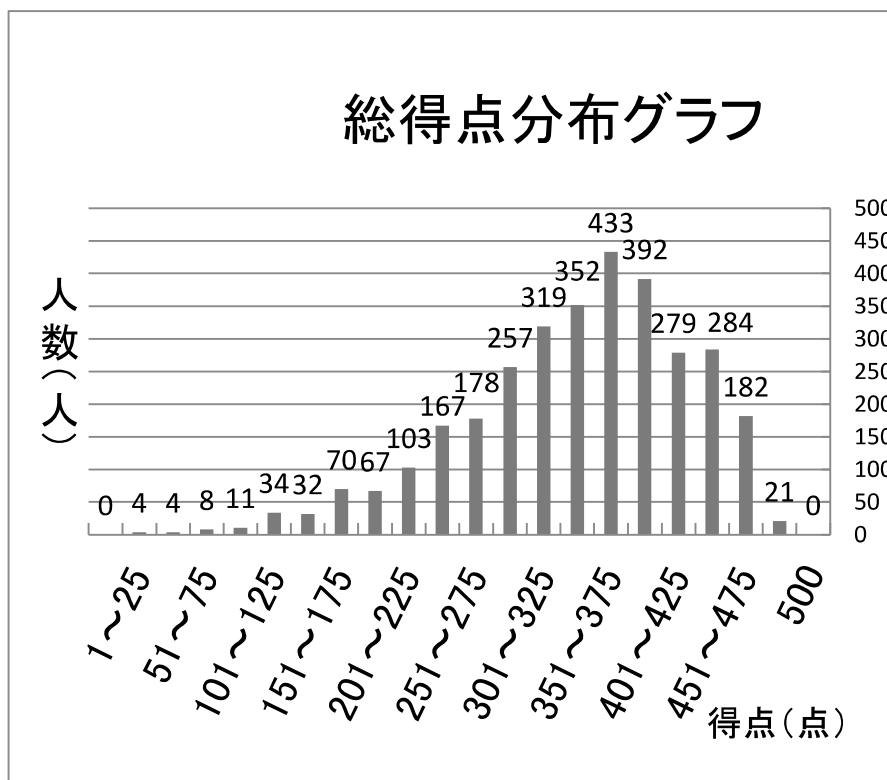
## III 結果の概況(小数第2位で四捨五入しているため、計が100%にならない場合がある。)

### 1 教科別全生徒平均点

国語	社会	数学	理科	英語	5教科
73.1点	52.2点	71.9点	70.9点	68.5点	337.4点

### 2 総得点分布表・グラフ

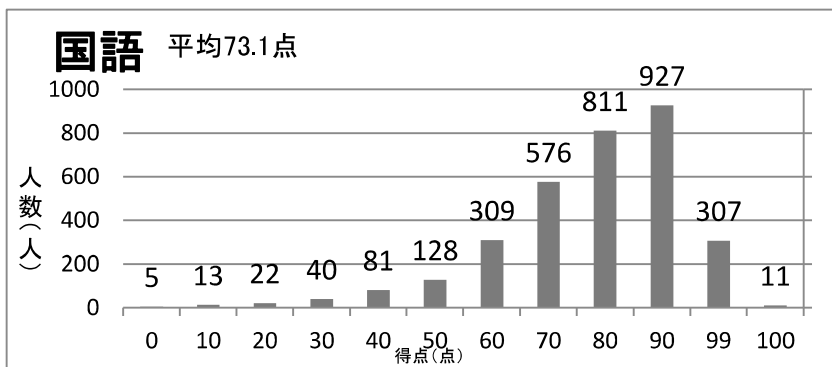
得点範囲	度数	%
500	0	0%
476~499	21	0.7%
451~475	182	5.7%
426~450	284	8.9%
401~425	279	8.7%
376~400	392	12.3%
351~375	433	13.5%
326~350	352	11.0%
301~325	319	10.0%
276~300	257	8.0%
251~275	178	5.6%
226~250	167	5.2%
201~225	103	3.2%
176~200	67	2.1%
151~175	70	2.2%
126~150	32	1.0%
101~125	34	1.1%
76~100	11	0.3%
51~75	8	0.3%
26~50	4	0.1%
1~25	4	0.1%
0	0	0.0%
計	3197	100.0%



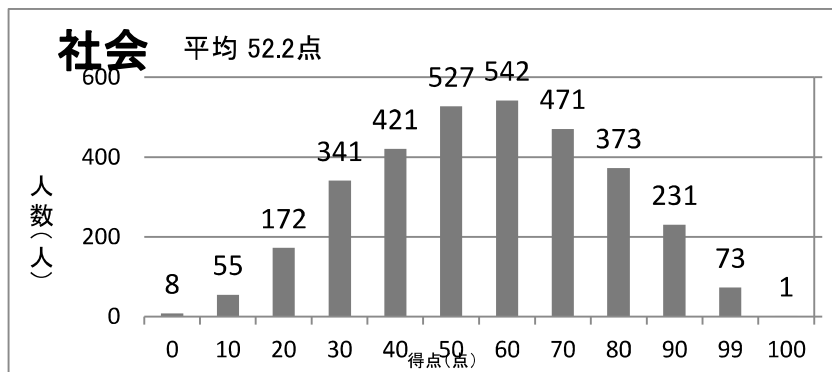
3 教科別得点分布表・グラフ

(小数第2位で四捨五入しているため、計が100%にならない場合がある。)

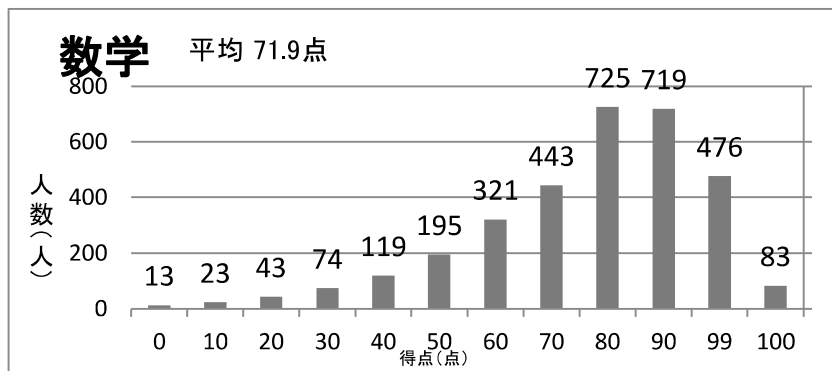
国語	得点範囲	度数	%
	100	11	0.3%
	91~99	307	9.5%
	81~90	927	28.7%
	71~80	811	25.1%
	61~70	576	17.8%
	51~60	309	9.6%
	41~50	128	4.0%
	31~40	81	2.5%
	21~30	40	1.2%
	11~20	22	0.7%
	1~10	13	0.4%
	0	5	0.2%
計		3230	100.0%



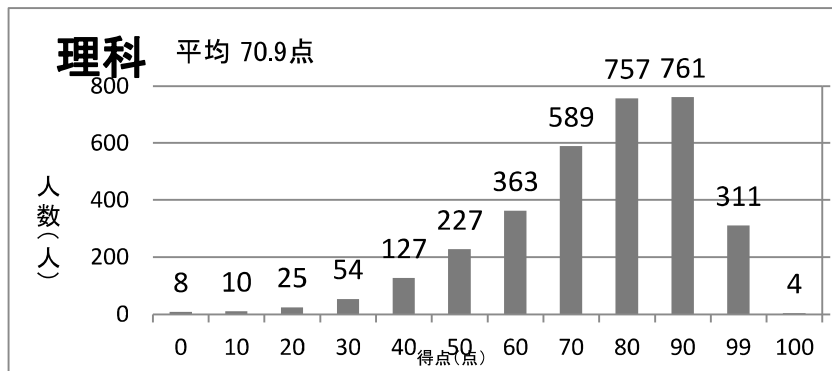
社会	得点範囲	度数	%
	100	1	0.0%
	91~99	73	2.3%
	81~90	231	7.2%
	71~80	373	11.6%
	61~70	471	14.7%
	51~60	542	16.9%
	41~50	527	16.4%
	31~40	421	13.1%
	21~30	341	10.6%
	11~20	172	5.3%
	1~10	55	1.7%
	0	8	0.2%
計		3215	100.0%



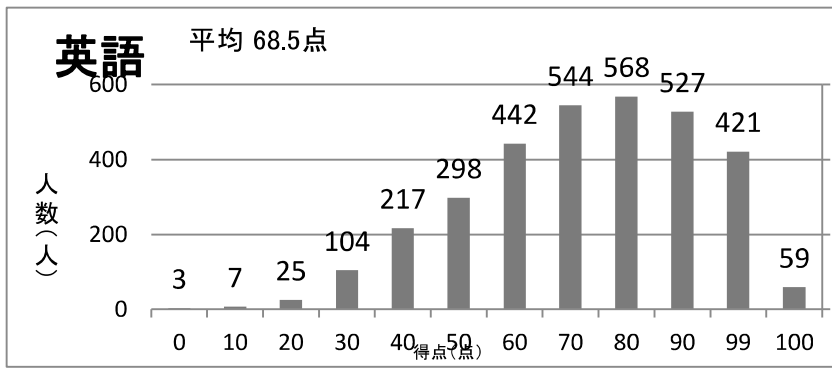
数学	得点範囲	度数	%
	100	83	2.6%
	91~99	476	14.7%
	81~90	719	22.2%
	71~80	725	22.4%
	61~70	443	13.7%
	51~60	321	9.9%
	41~50	195	6.0%
	31~40	119	3.7%
	21~30	74	2.3%
	11~20	43	1.3%
	1~10	23	0.7%
	0	13	0.4%
計		3234	100.0%



理科	得点範囲	度数	%
	100	4	0.1%
	91~99	311	9.6%
	81~90	761	23.5%
	71~80	757	23.4%
	61~70	589	18.2%
	51~60	363	11.2%
	41~50	227	7.0%
	31~40	127	3.9%
	21~30	54	1.7%
	11~20	25	0.8%
	1~10	10	0.3%
	0	8	0.2%
計		3236	100.0%



英語	得点範囲	度数	%
	100	59	1.8%
	91~99	421	13.1%
	81~90	527	16.4%
	71~80	568	17.7%
	61~70	544	16.9%
	51~60	442	13.7%
	41~50	298	9.3%
	31~40	217	6.7%
	21~30	104	3.2%
	11~20	25	0.8%
	1~10	7	0.2%
	0	3	0.1%
計		3215	100.0%





#### IV 結果の概要

##### 1 抽出調査について

26 中学校の各学級 8 人（男子 4 名、女子 4 名）をそれぞれ出席番号の早い順に 1 番から 4 番までを抽出生徒の記録としてデータを取る。欠席の場合は、出席番号を繰り上げて、各クラスから 8 人の抽出を行うものとした。

##### 2 抽出生徒数

学校数 学級数 抽出生徒数 26 校 95 学級 752 人（教科によって 751 名 附属中含む）

#### V 各教科の概要

##### 1 教科の考察

###### (1) 教科全体から見た結果

「得点分布表」「観点別解答率表」等から読み取れる教科全体の概要について、その特徴を表記する。

###### (2) 正答率の高い問題について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率の高い問題について、考察を行う。

###### (3) 読解力と正答率の関連について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率と読解力との関連について、実際の問題の一部を提示しながら考察を行う。

##### 2 今後の指導

1 の(3)で考察した読解力の視点も含め、今後の指導の工夫について表記する。

#### VI 読解力の視点からの考察

##### 1 読解力

文部科学省によると読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと」と定義されている。一般的には、主語と述語の関係や、「それ」などの指示語が何を指しているのかなど、文章で表された情報を的確に理解する力である。また、「PISA 型読解力」とは、一般的な文字や文章といった「連続型テキスト」の理解だけでなく、グラフや図表、地図など様々な資料（「非連続型テキスト」）を理解し、利用し、熟考する力であるとされている。

##### 2 読解力の視点からみえる課題

今回分析をした各教科における読解力をみる問題における正答率（複数問題が設定されている場合は、最も低い正答率）は以下のとおりである。

国語	社会	数学	理科	英語
16.5%	37.9%	31.6%	78.5%	72.2%

国語、社会、数学の正答率は、いずれも 40%を下回っている。教科によって正答率にばらつきがあることから、読解力の育成が重要な課題であると言える。各教科の分析については、次頁以降に詳しく掲載した。

全教科を通して、複数の資料から一つ一つの事柄や情報を読み取り、読み取った事柄や情報に関連づけて考えることに課題があると言える。さらに、関連づけて考えたことを自分の意見として適切に表現することにおいても課題がある。例えば、国語科における、指示語が指すことを理解したうえで、複数の叙述を基に登場人物の心情を理解する設問や、社会科での、2つの資料を適切に読み取り、それらに関連づけながら社会的事象の意味をとらえ、自分の考えたことを表す設問に関して正答率が低い。読解力の育成とともに、解釈したことを表現する力の育成においても課題があると言える。

##### 3 読解力の向上に向けた今後の指導

###### ○主体的な学びのある授業

生徒自身が「知りたい、考えたい」など課題をもつことによって、「その課題を解決するために、どのような事柄や情報が必要か」という必要感や切実感が生まれる。その際、一つの資料や情報だけでなく、様々な資料や情報の中から自分にとって必要なことを選択したり、2つ以上の内容に関連づけて整理・分析したりする過程を大切にする。そして、その過程をとおして分かったことや考察したことを書き表したり、人に伝えたりしながら、「自分の考えがより明確になった」「相手に分かりやすく伝わった」など、学んだことのよさが感じられるようになる。答えが一つではないことを仲間と話し合い、多様な見方や考え方に触れることを繰り返すことによって、読解力の向上を図ることができ、主体性のある生徒の育成につながる。

###### ○日常生活における言語感覚の醸成

新聞や広報誌等の記事や実用的な文章、表やグラフ等を読み、考えたこと等を仲間と伝え合う場を日常的に設けることによって、生徒の生活の中にある言葉や文章、表やグラフの意味、その背景にあることをとらえることにつながる。このような活動を積み重ねることにより、生徒自身がもっと知りたいことや確かめたいことを見つけ、自ら端末や辞書で意味を調べることも期待できる。そのためにも日ごろから、日常会話や作文等、豊かな言語環境を整えておきたい。

Ⅶ 抽出生徒から分析する各教科の概要

(小数第2位で四捨五入してあるため、正答率、誤答率、無答率の合計が100%にならない場合がある。)

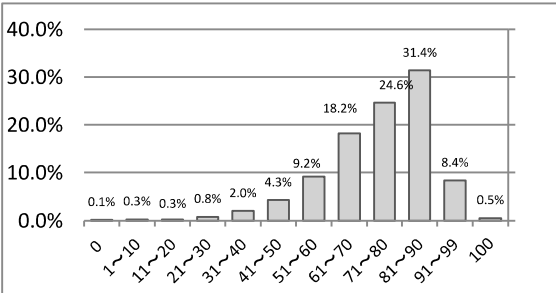
**国語** 抽出生徒数 752人 抽出平均 74.点

【設問別正答率表・グラフ】

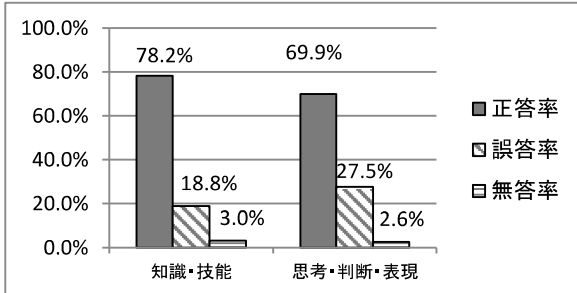
問題番号	観点	配点	正答率	誤答率	無答率
1	1	4	91.6%	7.6%	0.8%
2	1	4	61.8%	37.2%	0.9%
3	2	4	56.9%	35.4%	7.7%
4	2	4	76.9%	22.1%	1.1%
5	2	4	73.7%	24.2%	2.1%
6	2	4	38.2%	60.9%	0.9%
7	2	4	16.5%	76.9%	6.6%
8	1	4	95.5%	4.0%	0.5%
9	2	4	89.8%	9.6%	0.7%
10	2	4	83.8%	15.4%	0.8%
11	1	2	95.2%	4.5%	0.3%
12	1	2	75.0%	24.6%	0.4%
13	1	2	95.6%	4.1%	0.3%
14	1	2	86.8%	12.9%	0.3%
15	1	1	91.8%	8.0%	0.3%
16	1	1	92.7%	6.8%	0.5%
17	1	1	91.5%	7.7%	0.8%
18	1	1	81.1%	18.1%	0.8%
19	1	1	82.7%	16.4%	0.9%
20	1	1	28.1%	70.7%	1.2%
21	1	1	87.1%	11.0%	1.9%
22	1	1	78.2%	18.6%	3.2%
23	1	1	82.3%	14.9%	2.8%
24	1	1	53.6%	40.0%	6.4%
25	1	1	71.1%	21.3%	7.6%
26	1	1	88.4%	9.3%	2.3%
27	1	1	98.5%	0.9%	0.5%
28	1	1	97.5%	1.7%	0.8%
29	1	1	92.2%	7.0%	0.8%
30	1	1	98.7%	0.8%	0.5%
31	1	2	89.4%	10.1%	0.5%
32	1	2	92.0%	7.4%	0.5%
33	1	2	87.6%	11.8%	0.5%
34	1	2	64.0%	28.7%	7.3%
35	1	2	73.3%	21.8%	4.9%
36	1	2	68.0%	24.3%	7.7%
37	1	2	43.8%	47.2%	9.0%
38	1	2	44.8%	48.4%	6.8%
39	1	2	33.9%	54.9%	11.2%
40	1	2	61.3%	24.1%	14.6%
41	1	2	84.0%	10.4%	5.6%
42	2	2	93.1%	5.2%	1.7%
43	2	2	89.6%	8.5%	1.9%
44	2	2	80.9%	17.0%	2.1%
45	1	2	91.2%	5.7%	3.1%
46	1	2	86.3%	10.6%	3.1%
47	1	2	90.7%	6.3%	3.1%
48	1	2	44.3%	52.7%	3.1%

0.0% 10.0% 20.0% 30.0% 40.0% 50.0% 60.0% 70.0% 80.0% 90.0% 100.0%

【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



## 1 国語科の考察

### (1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は74.0点であり、昨年度(59.3点)から14.7点高くなっている。観点別の正答率は「知識・技能(78.2%)」より「思考・判断・表現(69.9%)」が低く、文学的な文章を読むことの問題(意味の似ている部分を文中から書き抜く、登場人物の心情を考える、文脈に応じて内容を理解する)の正答率が低かったためと考えられる。

### (2) 正答率の高い問題について

「知識・技能」を問う問題では、送り仮名のない漢字を読む問題(通し番号27、28、30)の正答率が97%以上と高い。また、同音の漢字を選ぶ問題(通し番号11、13)の正答率も95%以上と高い。漢字の読みや語句に関する基礎的な知識はおおむね定着していると考えられる。

「思考・判断・表現」を問う問題では、友達の意見文を読んで、その工夫についてあてはまるものを選ぶ問題(通し番号42~44)、条件に応じて情報を関連づけ、自分の考えを書く問題(通し番号45~47)の正答率が高い。最初に結論を述べたり理由や事例を明確にしたりするなど文章全体の構成や展開を考え、筋道の通った文章となるように書く力は身につけていると考えられる。

### (3) 読解力と正答率の関連について

文学的な文章の読解で、物語に繰り返し出てくる表現の効果を捉え、正しい答えを選ぶ問題(通し番号9)の正答率は89.8%と高かった。繰り返しの表現に着目し、それが物語の中で読み手に与える効果について考えながら読むことはできていると考えられる。しかし、文脈に応じて登場人物の心情を理解する問題(通し番号7)の正答率は16.5%と低い。特に、この問題は指示語が何を指しているかを理解した上で、さらに「そうでなくとも」という否定の言葉を踏まえて内容を正確に捉える必要がある。指示語が何を示しているのか捉えること、文脈に応じて登場人物の心情を理解することに課題が見られる。

(通し番号7)

そうでなくともよかった。とありますが、それはどういうことでしょう。

また、過去の類似問題でも正答率が低かった文の主語を選ぶ問題(通し番号20)の正答率は28.1%(R3正答率32.3%、R4正答率31.0%)であった。述語の主体に留意しながら読む力をつけること、形や位置にとらわれず、文章中の語句の役割を正しく捉えていくことが継続した課題である。

(通し番号20)

\_\_\_\_\_の主語として最も適切な部分をそれぞれ選んで、その記号を書きましょう。

アこれは、イ 去年 ウわたしが エかいた オお花の 絵です。

## 2 今後の授業に向けて

(1) 文学的な文章を扱う授業では、登場人物の行動の背景にある気持ちを、他の行動や会話等の叙述を基にとらえていくことが大切である。物語全体を見通し、複数の叙述から気持ちを推しはかり、「どこからそう思ったのか」と、とらえたことの基になる叙述を明らかにしながら読みの根拠を自覚できるよう指導することが効果的である。さらには、「作者は、なぜその表現を使ったのか」「その表現を使用することで、どのような効果があるのか」など、表現に着目し、様々な表現が読み手に与える効果について考えながら読む学習活動に取り組みたい。

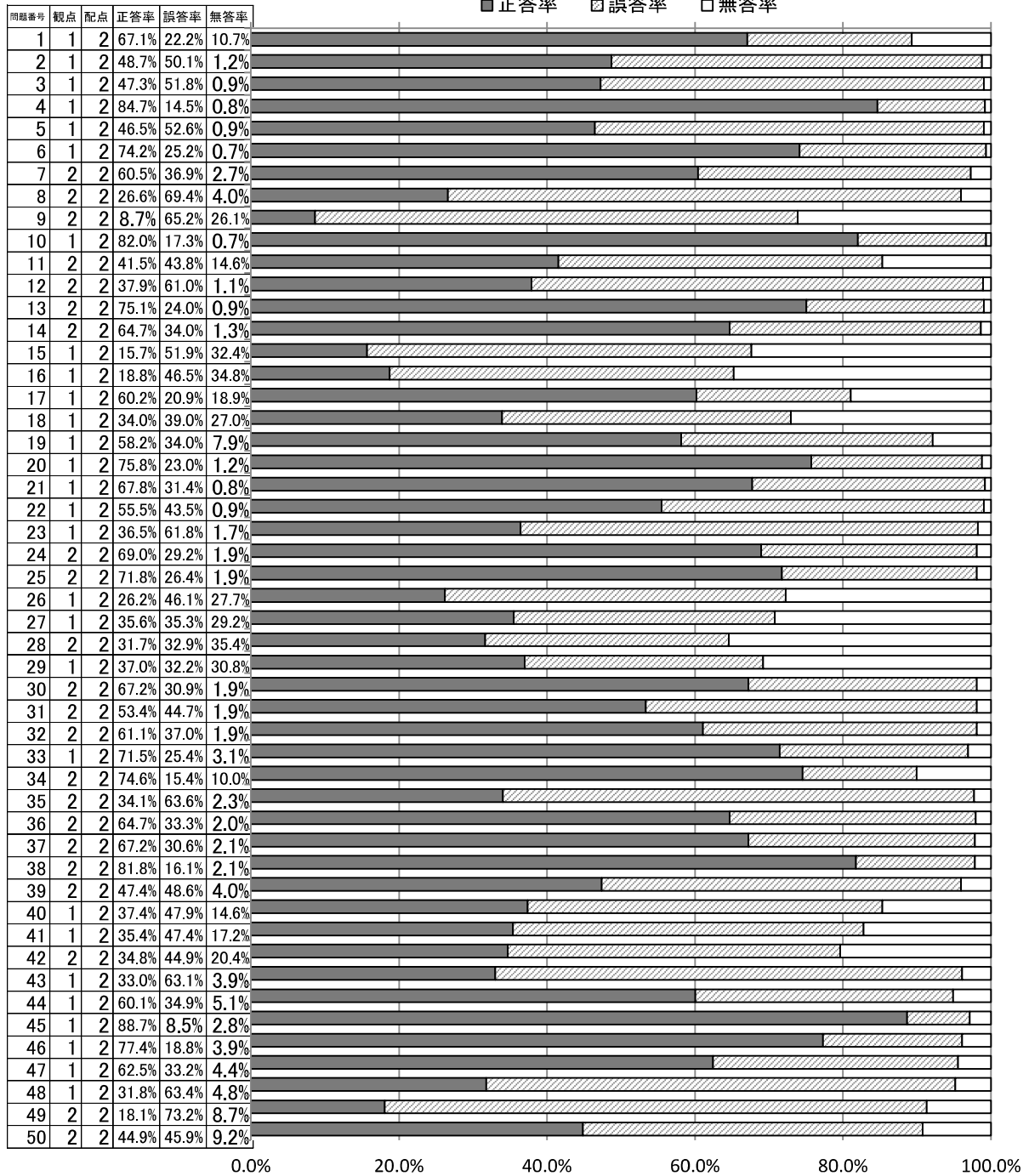
(2) 学習時だけでなく、生活の中でも知らない言葉や漢字が出てきたら端末や辞書で調べる、日常よく使われる敬語を学校行事や来客があったときに関連させて指導する、普段書く文章の中で、常に語句と語句の係り受けを意識するなどの指導を継続的に行い、話や文章の中で使いこなせる語句の数を増やしていくことが大切である。また、語彙を豊かにするために、教科書に掲載されている文章だけではなく、図書室の書籍、新聞等で、優れた表現に触れたり語感や言葉の使い方に関する感覚を養ったりするなど読書活動の推進にも力を注ぎたい。

**社会**

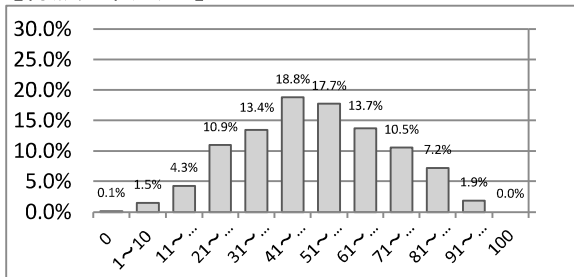
抽出生徒数 751人

抽出平均 52.1点

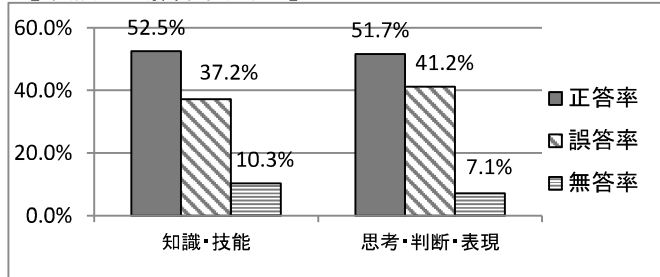
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



# 1 社会科の考察

## (1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は、52.1点である。観点別の正答率は、「知識・技能」が52.5%、「思考・判断・表現」が51.7%であった。

内閣の働きについて当てはまる言葉を選択する問題の正答率が高い一方で、気温と降水量のグラフを見て4つの都市を北から順に並べる問題や、資料から日本とつながりの深い国とその国の特色について選択する問題の正答率が低い。事象の特色や意味まで理解できるように、地図やグラフから読み取ったことを既習事項と比較したり、関連づけたりするといった資料活用の学習場面を充実させる必要がある。

無答率が10%以上の問題は15問あり、昨年度(8問)より増加した。工業地帯・地域の名称や立法府の名称、「参勤交代」「富国強兵」「太平洋ベルト」等、語句を答える問題の無答率が高い。また記述式の問題の無答率も高く、社会的事象について課題を解決する場面や、学習のまとめ・表現の場面において、複数の用語や語句を関連づけながら表現することで、理解を深め、活用できる知識として習得できるようにすることが求められる。

## (2) 正答率の高い問題について

「知識・技能」を問う問題では、日本列島を構成する島の名称を書く問題や、自然災害と関連する取り組みや施設を選択する問題、内閣の働きについて選択する問題(通し番号4、10、45)の正答率が高かった。また、「思考・判断・表現」を問う問題では、トレーサビリティについて生産者の工夫に当てはまるものを選択する問題や、原爆ドームが保存されている理由を記述する問題、平和主義と関係が深い資料を選択する問題(通し番号13、34、38)の正答率が高かった。既習事項や生活経験と結びつけて社会的事象の特色をとらえる力が身につけていると考えられる。

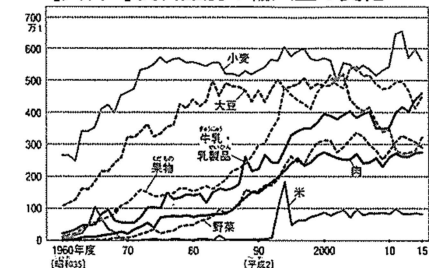
## (3) 読解力と正答率の関連について

食料品別の輸入量のグラフと一人1日あたりの食べ物の割合のグラフを読み取り、2つの資料を関連づけて、日本の食生活の変化について考え、適切に表現しているものを選択する問題(通し番号12)は、正答率が37.9%と低かった。それぞれの資料を適切に読み取り、その特色をとらえるとともに、複数の資料を関連づけて社会的事象の意味を考えることに課題がある。

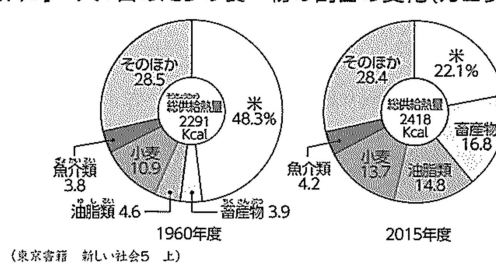
(通し番号12)

(1) 【資料4】【資料5】から考えられることとして、ア～エから正しいものを選び、記号を書きましょう。

【資料4】食料品別の輸入量の変化



【資料5】一人1日あたりの食べ物の割合の変化(カロリーベース)



- ア 小麦は食料品の中で最も多く輸入されるようになり、食料自給率も高くなってきた。
- イ 肉や乳製品の輸入が増えてきたことで、食生活が和風から洋風へと変化してきた。
- ウ 1990年ごろから米の輸入も始まったことで、食品ロスも問題になってきた。
- エ 農業や水産業で働く人の割合が減少してきたが、食生活は豊かになってきた。

## 2 今後の授業に向けて

(1) 資料を読み取る場面では、資料から何を読み取るのかという目的意識を明確にした活動が必要である。特に、グラフ等から変化を読み取る場合は、内容を読み取ることに加えて、「なぜ変化したのか」について考える場を設けることが大切である。「変わったこと」と「変わらないこと」を比較し、「なぜ変化したのか」という課題について身の回りにある情報を活用しながら解決する過程を通して、必要な情報を取捨選択し、適切に考察する力を高めることができる。

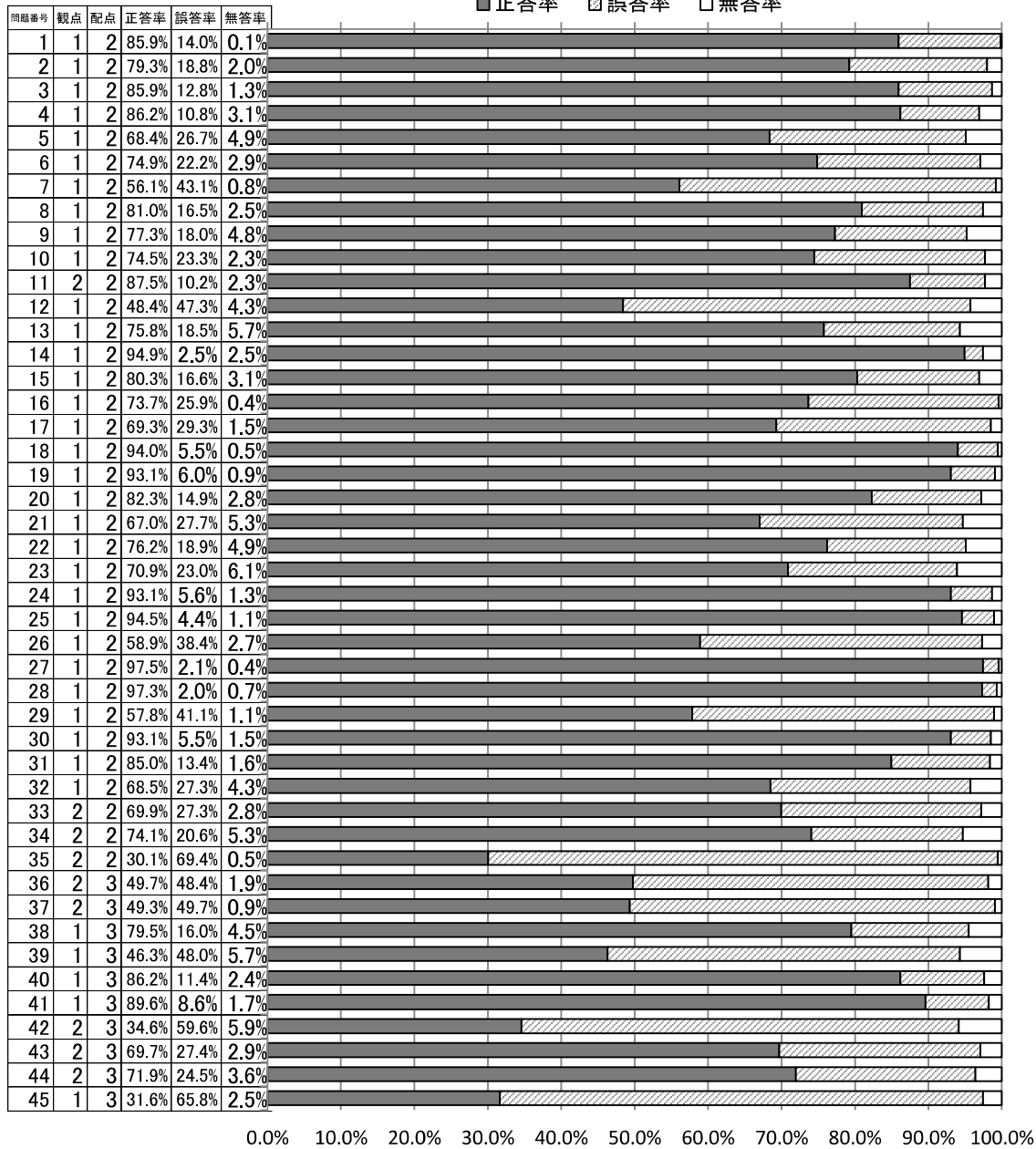
(2) 社会的事象の意味や特色について理解を深めるためには、生徒の思考にゆさぶりをかける学習課題が大切である。例えば、「自動車をつくる工業」の学習において、「なぜ自動車は何回もつくり変えられてきたのか」と学習課題を設定することで、消費者のニーズや環境問題といった既習事項と結びつけたり、我が家の自動車にまつわるエピソードから機能性や燃料といった生活経験を思い起こしたりするなど、一律の答えではない納得解を求めて学習する過程で、様々な知識を関連づけながら習得することができる。

# 数 学

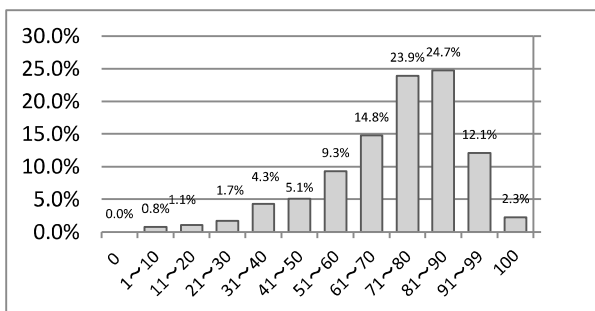
抽出生徒数 752人

抽出平均 72.3点

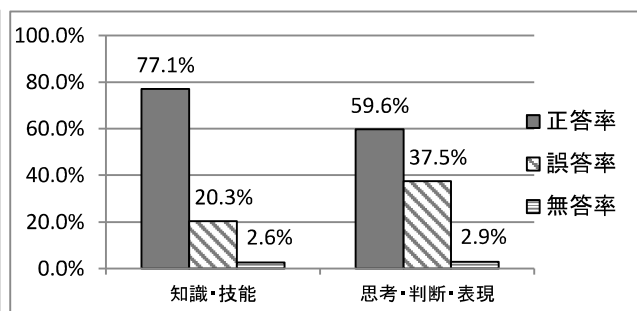
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



## 1 数学科の考察

### (1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は、72.3点であり、昨年度より2.3点高くなっている。観点別の正答率は「知識・技能」が77.1%、「思考・判断・表現」は59.6%である。領域別に正答率を比較すると、「A数と計算」が79.2%、「B図形」が73.7%「C測定、変化と関係」が64.2%、「Dデータの活用」が77.4%であり、「C測定、変化と関係」だけが、70%を下回っている。さらに、「C測定、変化と関係」は、正答率が50%以下の問題が12問中4問と最多であり、この領域における学習に課題がみられる。

### (2) 正答率の高い問題について

拡大図の性質を用いて対応する辺の長さや角の大きさを求める問題（通し番号18、19）は正答率が93%を超え、線対称な図形の性質を用いて対応する辺の長さや角の大きさを求める問題（通し番号27、28）は正答率が97%を超えていることから、図形の性質に関する基本的な知識が定着していると考えられる。

### (3) 読解力と正答率の関連について

数直線上に示された数量の関係を読み取る問題（通し番号43）は、正答率が69.7%である。伴って変わる2つの数量の關係に着目し、未知の数量を求める問題（通し番号44）は、71.9%である。2つの問題の正答率が約70%であるのに対し、日常の具体的な場面において割合の意味について理解しているかを問う問題（通し番号45）の正答率は、31.6%である。飲み物の量に対する果汁の量の割合が、飲み物の濃さを表していることを理解できていなかったと考えられる。このことから、本質的に「割合」の意味を理解し、知識を獲得していくためには、「飲み物の量に対する果汁の量の割合を計算で求めた結果」だけを目的とするのではなく、「果汁が含まれている飲み物を2つに等しく分けても、飲み物の濃さは変わらないという生活経験を基にした判断」と「複数の計算による結果」の両方を関連づけ、考察することが重要である。

(通し番号45)

[17] りんごの果汁が20%ふくまれている飲み物について考えます。次の問いに答えましょう。（中略）

(3) この飲み物200mLを2人で等しく分けると、1人分は100mLになります。この飲み物にふくまれる果汁の割合について正しくまとめている文を、下の㉠～㉢の中から1つ選びましょう。

㉠ 飲み物の量が  $\frac{1}{2}$  になると、果汁の割合は2倍になります。

㉡ 飲み物の量が  $\frac{1}{2}$  になると、果汁の割合も  $\frac{1}{2}$  になります。

㉢ 飲み物の量が  $\frac{1}{2}$  になっても、果汁の割合は変わりません。

## 2 今後の授業に向けて

- (1) 領域「変化と関係」の学習について理解を図るためには、日常の具体的な場面から課題を設定し、実感を伴った問題解決的な学習（PBL）を行うことが効果的である。安易に公式に当てはめて時速を求めたり、単位を換算したりするだけでは、学んだことを活用する力はつかない。子どもたち一人一人が身の回りの事象に関心を向けて出てきた素朴な疑問から、伴って変わる2つの数量を見だし、図や表等に整理して2つの数量の關係に着目できるようにするなど、個に応じた柔軟な学習活動を進めたい。
- (2) 日常の事象を数理的に捉え、筋道を立てて考察する力をつけるためには、試行錯誤をする過程が欠かせない。教師が子どもの考えを安易に整理したり、置き換えたりすることは、子どもの試行錯誤の妨げとなることがある。子ども同士が自分の考えを伝えたり、聞いたりしながら互いの考えの妥当性を確かめる場の設定が大切である。

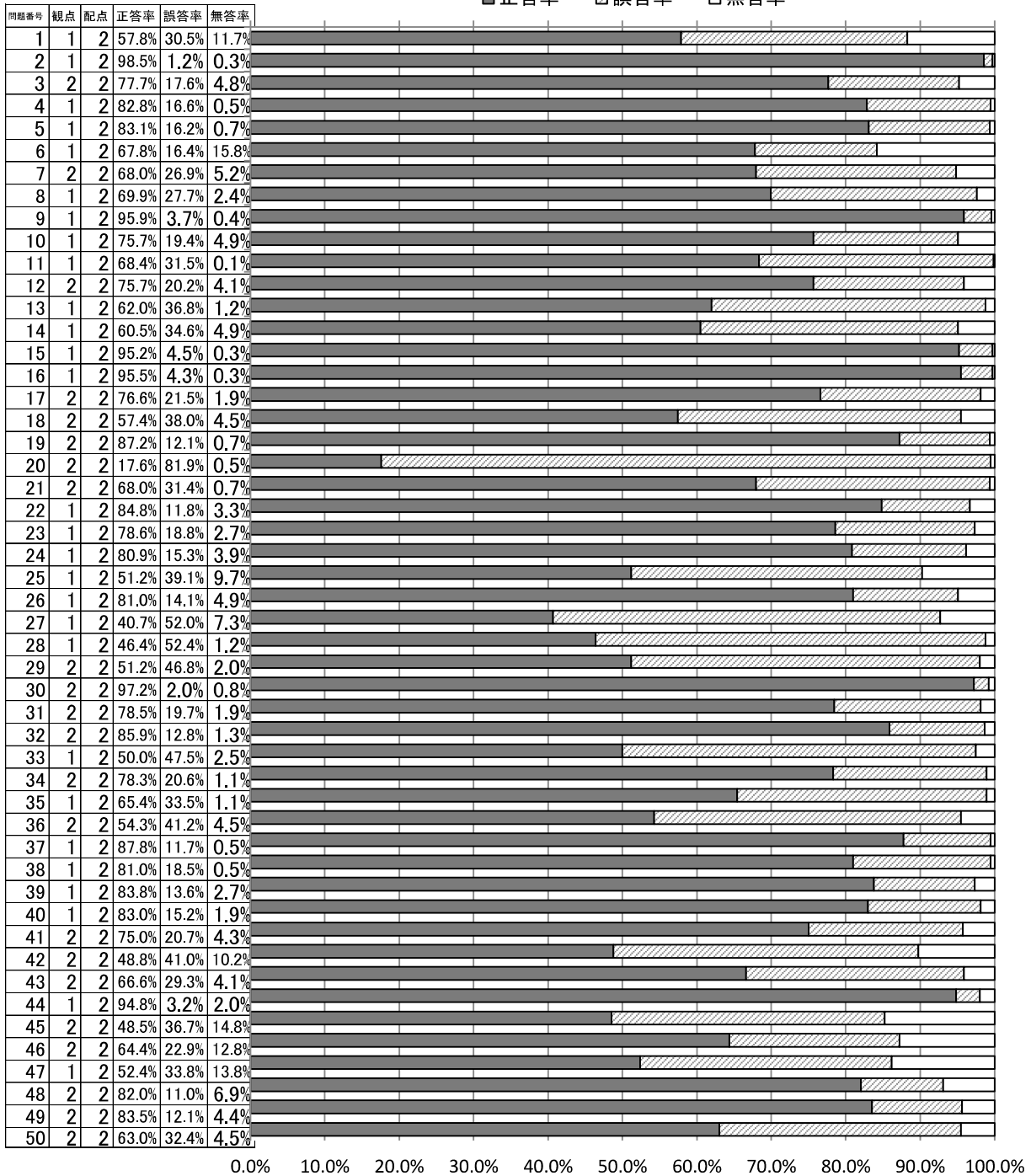
**理科**

抽出生徒数 752人

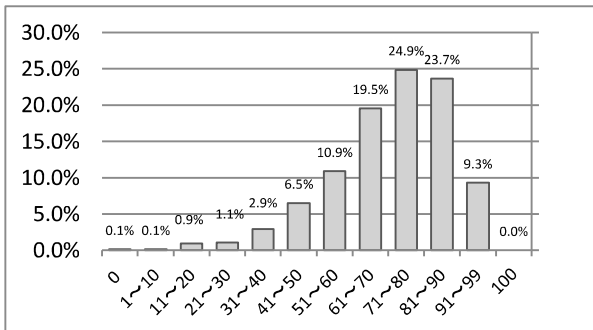
抽出平均 71.6点

【設問別正答率表・グラフ】

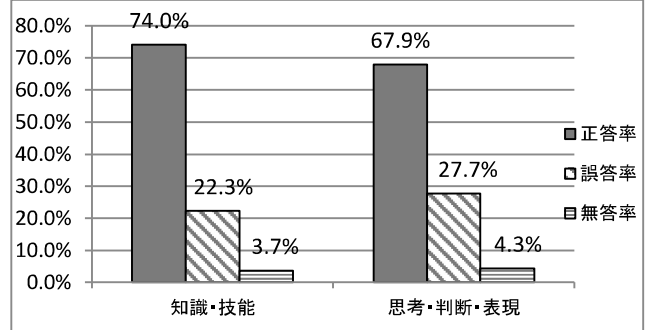
■ 正答率 □ 誤答率 □ 無答率



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】





## 1 理科の考察

### (1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は 71.6 点であり、昨年度より 3 点高くなっている。観点別の正答率は知識・技能が 74.0%、思考力・判断力・表現力は 67.9%であった。無答率が 6%を越えた問題は 9 問（問題数全体の 18%）であり、昨年度より 5 問多かった。そのうちの 5 問は、器具や器官、成分や実験方法の名称を答える問題だった。残りの 4 問は、実験や観察の結果から性質や規則性と関連づけて自然の事物や現象を説明するものであった。これらのことから器具や器官、成分の役割を理解することや、理解したことを基に自然の事物・現象について表現することに課題があると考えられる。

### (2) 正答率の高い問題について

自然の事物・現象の性質等について問う問題（通し番号 2、9、15、16、30、44）は 94%以上の正答率であった。この問題は、メスシリンダーを正しく読み取るための目の位置、メダカの水槽に水草を入れる理由、雲の量による天気判断、木がよく燃えるための木の置き方、LED の特徴をとらえる問題であった。子どもたちは、観察や実験をとおして、実感を伴いながら自然の事物や現象について理解し、基礎的・基本的な知識・技能を習得していると考えられる。

### (3) 読解力と正答率との関連について

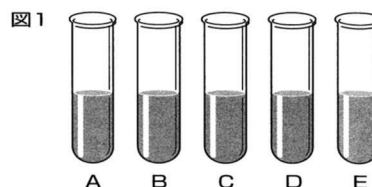
[7] は、水溶液について、溶けているものによって性質や働きの違いがあることを理解し、より妥当な考えをつくりだす問題である。[7] (4)（通し番号 42）は、条件と水溶液の性質に着目しながら、より妥当性のある 2 つの水溶液に絞り、「アルカリ性」の石灰水とアンモニア水であることを読み取る。さらに、「水溶液を蒸発させた結果」についての知識・技能を活用しながら水溶液の正体を推測する力が必要となる。この問題の正答率は 48.8%、誤答率は 41%、無答率は 10.2%であった。複数の事実や知識と関連づけながら考察し、結果や結論を見いだす力、科学的事象の変化やその過程について自分の言葉で表現することに課題がある。

(通し番号 39～43)

(7) 水溶液の性質について答えましょう。

右の図 1 の A～E は種類の違う 5 つの水溶液です。5 つの水溶液について、次のことが分かっています。

- ① 入っている水溶液は、食塩水、石灰水、アンモニア水、塩酸、炭酸水のいずれかです。
- ② 赤色のリトマス紙につけると、青色に変わったのは、C と E の水溶液でした。
- ③ 青色のリトマス紙につけると、赤色に変わったのは、A と B の水溶液でした。



## 2 今後の授業に向けて

(1) 実感を伴う理解につなげていくためには、生徒が理科の見方・考え方を働かせ、主体的に自然の事物・現象に関する課題を解決できる問題解決型の学習を展開していくことが大切である。その際、生徒自身が、既習の内容や生活経験を基にして根拠のある予想や仮説を立て、さらに、それを確かめるための観察、実験の方法を発想できるような場を設定する。このようにして得られた観察、実験の結果は、生徒自身が明確に認識することができ、その結果を基に、生徒自ら考察することや結論を見いだす姿も期待できる。このような学習を継続して取り上げ、実感を伴った理解につなげていくようにする。

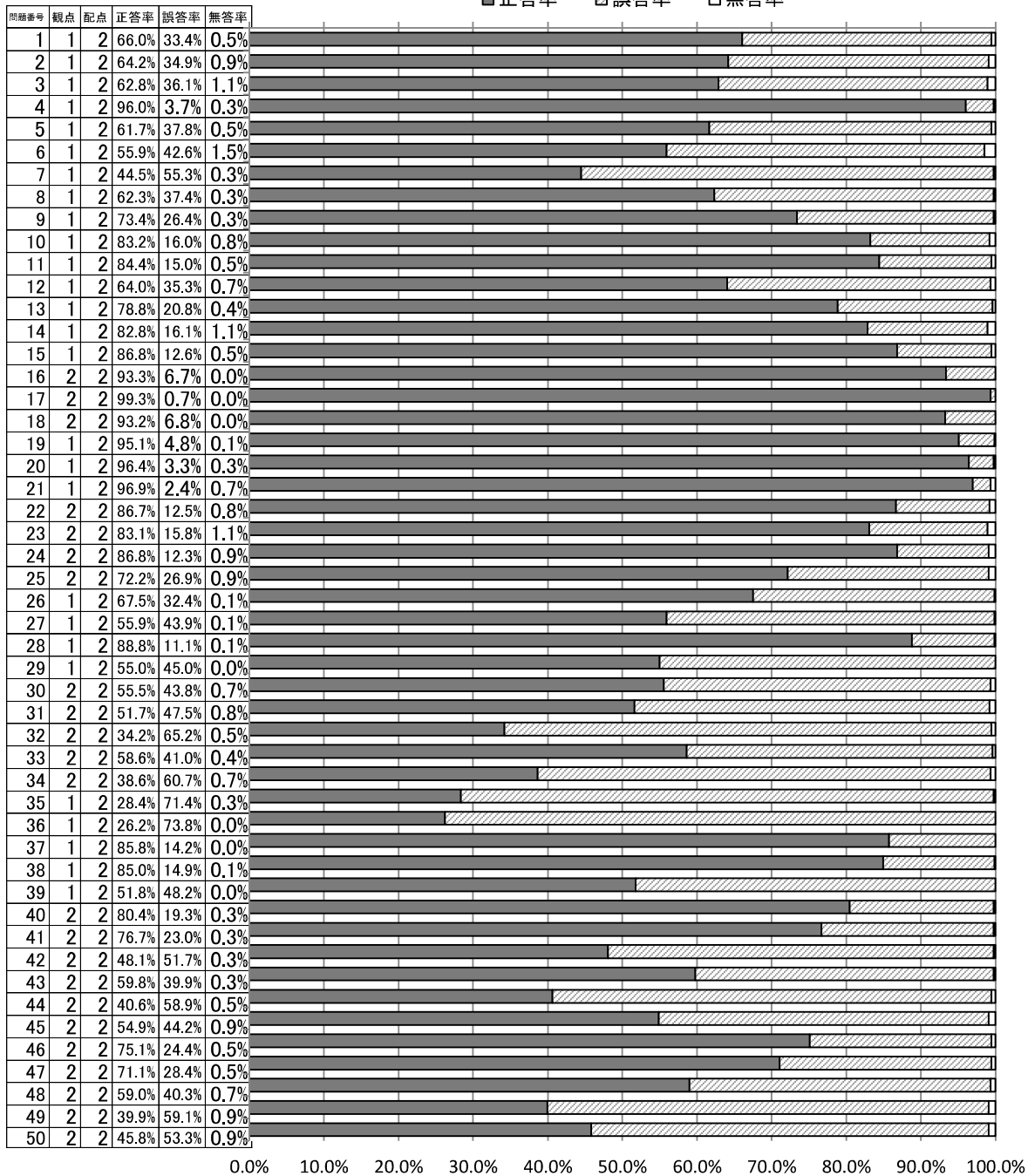
(2) 科学的に解釈する力や表現する力を育成するために、観察や実験においては、数値を記すだけでなく、図やグラフ・表・モデル等を使って、様々な角度から多面的にとらえ考える必要がある。そして、読み取った事実や規則性を関連づけ、予想や仮説、結果や考察について自分の考えを述べて書き下す機会を充実させる。

英語

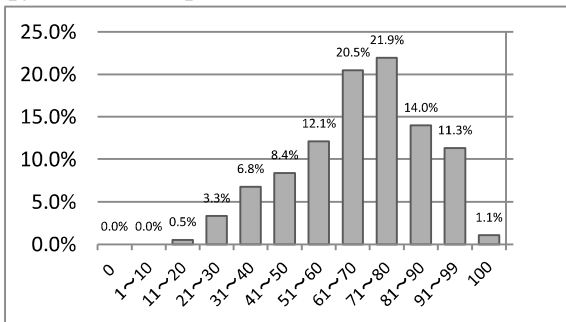
抽出生徒数 751人

抽出平均 68.1点

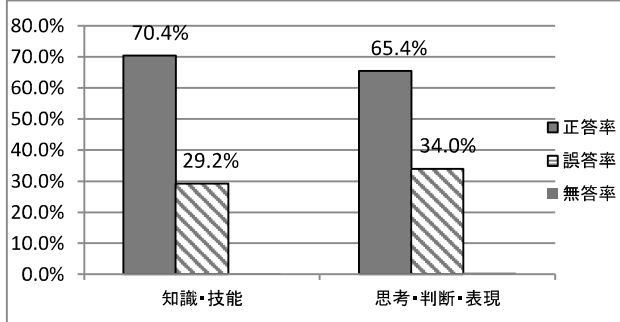
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



## 1 英語科の考察

### (1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は 68.1 点であり、昨年度より 15 点低くなっている。観点別でみると、「知識・技能」の正答率が 70.4%に対し、「思考・判断・表現」の正答率が 65.4%と 5%低くなっている。「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」である「思考・判断・表現」に関する問題を昨年度の 13 問から 23 問にし、「知識・技能」に関する問題を 37 問から 27 問にしたことも、全体の平均点が低くなった一因と考えられる。

### (2) 正答率の高い問題について

「知識・技能」に関する問題では、“artist”の聞き取り（通し番号 4）、時間割に関する話の聞き取り（通し番号 19～21）の正答率が 9 割を超えた。

「思考・判断・表現」（全 11 問）に関する問題では、挨拶等の表現の聞き取り（通し番号 16～18）の正答率が 9 割を超えた。日常的に慣れ親しんでいる表現や授業等で繰り返し使用している表現が定着していると考えられる。

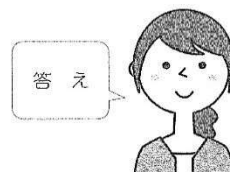
### (3) 読解力と正答率の関連について

（通し番号 22～25）

#### 【放送】

- (1) How are you?
- (2) How's the weather?
- (3) What sport do you like?
- (4) What is your treasure?

〔8〕これから英語で(1)～(4)の4つの質問をします。それぞれの質問に合う答えを、下のア～カから選んで記号で答えましょう。



(1) \_\_\_\_\_ (2) \_\_\_\_\_ (3) \_\_\_\_\_ (4) \_\_\_\_\_

ア I'm fine.                      イ I like soccer.                      ウ It's sunny.  
エ I like English.                      オ This book.                      カ March ten.

読解力を見る問題として設定された、「日常生活に関する事柄についての質問を聞き、適切に答えている表現を選ぶ問題（通し番号 22～25）」では、それぞれの正答率が 86.7%、83.1%、86.8%、72.2%であった。日常生活や授業でよく使う表現については、英短文を理解し返答することができるが、“treasure”のように普段からは使わない単語を聞き取って理解することには困難さがあったと考えられる。

## 2 今後の授業に向けて

- (1) 「知識及び技能」については、常に言語活動と併せて指導することが大切であり、言語材料と言語活動とを効果的に関連づけて指導することが重要である。授業の中で身近な生活の場面を設定して英語表現に慣れ親しむようにしたり、朝活動や休み時間、給食時間等でも頻繁に英語表現を取り入れたりするなど、カリキュラム・マネジメントにも積極的に取り組むことで、自分を表現する手段として英語を活用できるようにしたい。
- (2) 「思考力、判断力、表現力等」育成のためには、情報を整理しながら考えを形成し、表現することを通して、身につけることができるように指導しなければならない。自分のこと、仲間や家族、学校生活等、身近な事柄について、自分の考えと相手の考えを比較したり、身につけた知識・技能を活用したりしながら、自分の考えを再構築できるようにしたい。そのために、自分の姿や考えの変容について自覚できるよう、Chromebookを活用してスタディ・ログを残すなど工夫しながら、振り返り活動を充実させることが大切である。
- (3) 「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を養うために、まず、子ども自身から生まれる好奇心に基づく学びへの動機づけを尊重する。「友達に『いいね!』と英語で言いたいけれど、どんな言い方があるのかな」など、「使いたいから知りたい、覚えたい」という言語に対する意欲を高め、それを実際に使った達成感を連動させ、好循環をつくり出していくことが、英語に対する主体性を育むことにつながる。そのために、活用場面を具体的に想定し、生徒自身が活用するイメージをもって学習や言語活動に取り組むことができるような課題設定、環境整備に努める。